

「走れメロス」さまざまなアプローチ

学校現場では「走れメロス」を使って、さまざまな授業が行われています。今回は、その中でも特色ある実践をピックアップしてご紹介いたします。

実践1 シラーの「人質」と比較して読む

単元名

「走れメロス」

文学の言葉と表現の意図

お茶の水女子大学附属中学校教諭

宗我部義則

1 単元のねらい

「走れメロス」の原案となったシラーの「人質」(学習指導書2下 P.207-210)と比べ読みをし、太宰が何を肉付けし、どう書き換えているのかを見ていくことで、表現に込められた太宰の意図や工夫を探る。

2 学習の展開

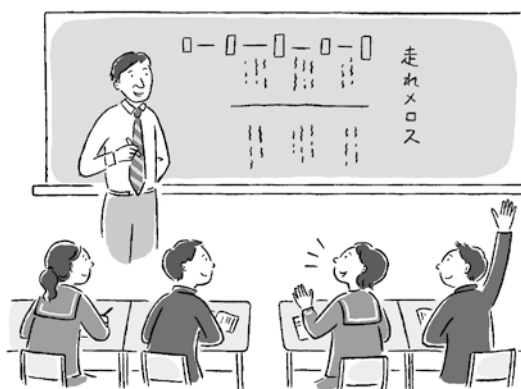
- ①学習のガイダンスと全文の通読
 - ・学習の目標をつかむ。
 - ・「走れメロス」の全文を読み、感想をまとめる。
- ②感想の交流と「人質」の通読
 - ・感想を交流し、読みの視点や受け止め方を広げる。
 - ・原案の存在を知り「人質」を通読して、異同について自分の気づきをまとめる。
- ③「人質」との異同を発表し合い、読みの視点をもつ。
 - ・気づいた異同を「走れメロス」の展開に沿って整理する。
 - ・両者の違いから問いを立てる。
 - ・モデルを見て、表現の意図や効果について自分の考えをまとめる。

3 授業の様子・生徒の反応など

当初、生徒たちは「走れメロス」そのままの内容の「人質」の存在に戸惑いを隠せない様子だった。しかし、どちらの作品がおもしろいか尋ねると「断然メロスのほうがおもしろい」と答える。そこから、「では、なぜメロスのほうがおもしろいんだろう。その秘密を解き明かしていこう」と投げかけた。

4 グループで交流し、各自が考えた表現の意図や効果について検討し合う。

- ④グループで交流し、各自が考えた表現の意図や効果について検討し合う。
 - ・表現の意図や効果について各自の考えをグループで交流する。
 - ・交流による気づきや深まりを全体で発表し合う。
- ⑤学習のまとめをする
 - ・取り上げた表現や内容をもとに「走れメロスのヒミツ」レポートをまとめる。



生徒たちには、「走れメロス」と「人質」を全文掲載した二枚のA3のプリントを配布し、二つのテキストを見渡して比較できるようにした。両者の違いを確かめていくと、やがてメロスや王の人間性、メロスの葛藤やセリヌンティウスとの信実など、太宰が膨らませた内容が鮮明になる。また、山賊やフィロストラトスなど端役に見える人物の設定まで変えて再構成している様子に気づき、「太宰はなぜこんなふうに変えたのか」「味わいを深めている表現のヒミツは何か」といった問いが鮮明になってくる。生徒たちは主体的にテキストを読み込んでいき、次のような意見を出していった。

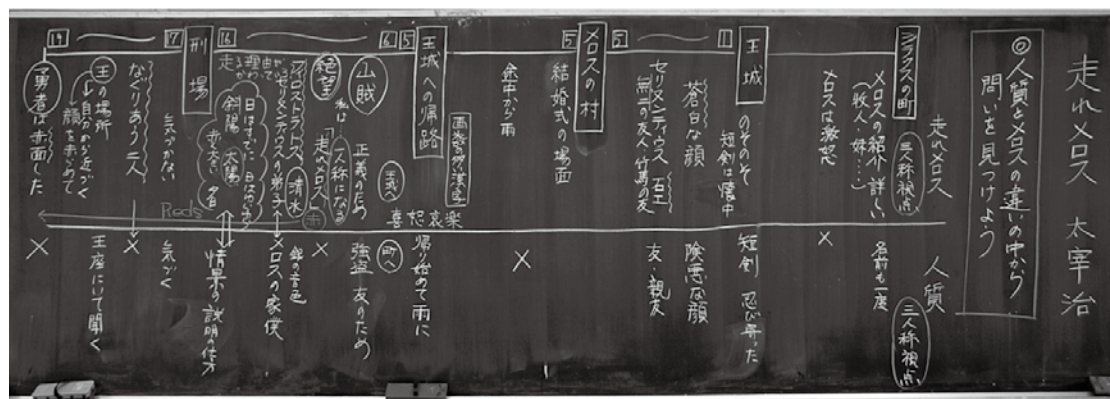
○「人質」では、友・親友としか書かれて

4 考察

いないセリヌンティウスが、「走れメロス」では「石工」という設定になっている。これは、固い石さへ砕き削る石工から、セリヌンティウスが友を信じることを貫き通す、信じる心の固さのイメージが生まれるようにしたのではないか。○フィロストラトスが「人質」ではメロスの下僕。ということはメロスはシラクス

筋書きだけの原詩と比較することで、人物の人間性や心情、作品の主題等が浮かび上がらせる言葉や表現。文学の言葉・表現こそが注目されることになった。

表現を作り出した作者の意図を考え、一つ一つの言葉や表現を意味づける中で、自分の読みを形成していくことを楽しむような読み方を、経験させることができたと思う。



▲板書例 上段は「走れメロス」、下段は「人質」。場面ごとに違いを書き出していく。



特集



実践2 語り手の視点に 着目して読む

単元名

「文学作品での 語り手の視点を読む」

鹿児島市立明和中学校教諭

伊藤彰郎

1 単元のねらい

「走れメロス」と、他のさまざまな作品の語り手の視点を読み比べ、文学作品における語り手の視点の重要性を考える。

2 学習の展開

- ① 学習の流れを知り、全文を通読する。
- ② 二種類の語り手（一人称・三人称）による他の作品を通読し、語り手の立場の違いに気づく。
- ③ 「走れメロス」の語り手の立場が三人称であることに気づく。
- ④ ②で通読した三人称の文章と、「走れメロス」の語り手の異同について考え、グループで意見を交流する。

- ⑤ 「走れメロス」での語り手の効果や作者の意図を考え、交流する。

3 授業の様子・生徒の反応など

一人称（語り手＝中心人物）・三人称（第三者）による、視点や立場の違いに着目させていくつかの文章を通読させると、生徒たちはすぐに語り手の視点の違いを認識した。また、一年のときに「少年の日の思い出」で、語り手の視点を変えて書く学習もしている。そのことも想起させながら、再度「走れメロス」を読み返し、「第三者による語りでありながらも、『メロスほどの男』等の表記から、かなりメロスに肩入れした視点で語られている」という意見と根拠が、グループでの意見交流から表出した。「三人称＝客観的な語り手」というイメージをもつ生徒たちは、「なぜ太宰は、そのような語り手を設定したのか」という問いに対して、意欲的に解答を導き出そうとし、次のような意見が出された。

○あえてメロスに好意的な表現で述べることで、読み手に「勇者とは何か」ということを考えさせようとしているのではないか。

○メロスは完璧ではなく欠点もある人間だが、それが人間というものだ。太宰自身



メロスのような正直な人間に対して憧れを抱いていて、それが勇者という評価につながっている。

4 考察

文学作品において、「語り手＝作者」であると安直に認識している生徒は少なくない。文学作品における語り手の立場を意識して読む学習を経て、作者の意図や表現の効果について読み深めようとする姿が現れた。また、そこから、人間の在り方に対する深い考察を行おうとすることで、作品の魅力や奥深さを味わおうとすることにつながったと思う。

実践3 インタビュー形式 で読みを深める

単元名

「メロスに インタビューしよう」

札幌市 中学校教諭

Y先生

1 単元のねらい

「走れメロス」の描写や会話に着目し、登場人物の心情の変化と場面の関係性を捉え、グループごとにインタビュー形式の発表を行うことで、作品をより豊かに味わう。

2 学習の展開

- ① 学習の流れを知り、全文を通読する。
- ② 四人グループになり、表現に着目し、場面の变化を読み取る。
- ③ メロスとインタビュアー二人と司会者を決める。どの場面をインタビューの中心にするか話し合う。
- ④ グループで読みを深め、インタビュー発表の原稿を完成させる。
- ⑤ 各グループでインタビュー発表をする。



▲司会とメロス役の生徒が前に立ち、インタビュアーの二人は、自席から質問を投げかける。記者会見のイメージ。

3 授業の様子・生徒の反応など

「走れメロス」を読み、生徒に一次感想を聞くと「王様のひどさ」や「メロスの強さ」、「セリメンティウスの潔さ」などが述べられた。しかし、深く読み込む生徒からは「王様／メロス／セリメンティウスの弱さ」も挙げられた。そこで、これらの感想をもとに、どの場面でなぜそのような心情が変化していくのかという問いを示した。

激怒から始まる物語はさまざまな場面での心情の変化が読み取れる。そのため、生徒は場面ごとに分担を決め、読み込み、グループで交流し、心情の変化や人物像を捉えた。その後、グループで印象的だった場面をインタビュー発表の場面に選んだ。「妹の結婚式の場面」や「山賊に待ち伏せされ走れなくなる場面」、「フィロストラトスに会い走り続ける場面」、「セリメンティウスの頬を殴る場面」などが多く選ばれた。

4 考察

学習指導要領の第二学年「読むこと」(イ)「文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること」【文章の解釈】に沿って授業を進めたが、メロスの言動を読み込み、深めることで作品の全体像がより鮮明に直接的に読者に伝わるということがわかった。また、四人グループで学習することによって、自分の考えと他者の考えの相違点を交流し、より深い読みへとつながっていくということも感じられた。

発表では、メロス・インタビュアー二人・司会者という四人で構成し、メロスにインタビューする形式で各グループの読みを発表した。根拠になる言動を物語の中から拾い、解釈を述べた。同じ言動でも捉え方が異なるグループもあり、発表後さらに意見を求め、全体で内容を深めることができた。

授業の振り返りでは、「物語を読み込むことで、自分とメロスが一体化していく感じがした」「メロスが大切にしているものは、自分も大切にしているものだから共感がもてた」「登場人物の喜怒哀楽に引き込まれ、もっと作品を読み深めたいと思った」などの感想をもつ生徒が多かった。

特集

「走れメロス」——その魅力を探る

実践4

読むことで 自分と向き合う

單元名

「走れメロス」に映る 自分を見つめよう

横浜市 中学校教諭

M先生

1 単元のねらい

「走れメロス」を扱うときは、次の二点を学習の軸に据える。

(1) 物語によって心が揺さぶられる読み手Ⅱ
自分自身を見つめること

(2) 多くの人が同様に感じることと、自分を振り返って見つめたときに感じることを両方をたどりながら読んでいくこと

2 学習の展開

第一次では、あえて通読せず、物語の進行にシンクロしながら、場面ごとに次の活動を行う。それにより、一つ一つの表現に即した自分なりの考えが出やすくなる。

① 印象に残るフレーズを挙げ疑問をもつ。
例えば、「おまえの兄のいちばん嫌いな

ものは、…」(P186)に注目した場合、へではメロスが「好きなもの」は何だろっ?と考える。全体を六つの場面に分け、疑問の答えを自分なりにまとめる。

② 場面ごとに自分だったらどうするかを考える。メロス、王、セリヌンティウスなどと比べ、自分を振り返り、なぜそうするのか根拠をもってまとめる。

第二次では、意見を交流する。①については多くの人の考えや想像が意外にも似通っていること、②については読み手によって考え方やその背景が多様であることなどに気づきながら話し合いが進む。

第三次では、文章を再読し考えをまとめる。①、②それぞれ印象的なところを取り上げる。他の人の考えと比べたり、自分自身を振り返ったりしながらまとめる。

3 授業の様子・生徒の反応など

再読後にまとめた文章からは、次のような感想が聞かれた。

「私も今以上に友と向き合いたい」「王は目に見えない恐れから人を疑った。そういう弱さは僕にもある」「私も逃げたくなることがある。でも裏切り者になるより、王を見返して死ぬような生き方のほうがよっぽどよい」「命をかけられるほどの友人は



自分にはいない。でも裏切られるつらさは痛いほどわかる」「メロスはいつも自分を信じた。僕にはない勇気や誇りをもっている」「約束を守ることや人の命以上に大きなものとは何か。メロスにはそれがあったから走れたのだと思うと、生きるために必要なものののだ。僕もそれを見つけないと思っ

4 考察

「走れメロス」は、教室で扱う前に一読している生徒も多いが、自分自身と向き合いつながりながら読むことで何度も読める作品となる。このような作品は読むたびに新たな発見があり、いつしか座右に置くこととなる。作品が長年読み続けられるのは、人間の持つ普遍的な価値観を根底に有していると同時に、いつでも読み手の人生を映す鏡となるからだ。この学習を通して、文学的文章がもつそんな価値に気づかせ、生徒たちの自発的な読書の幅を広げさせたい。